
きみと出逢うための

五塔 寺桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみと出逢うための

【Nコード】

N1708Y

【作者名】

五塔 寺桃

【あらすじ】

それは、あまりに突然の出来事だった。 / / / 一足先に元の姿に戻った志保さんと、おあずけを食らっているコナン君のお話です。「新一にとって蘭は元々恋愛対象ではない」という捏造設定がベースになっていますので、新蘭派の方は迷わずバックでお願いします。CPはコ志風味 新志の予定です。

01 (前書き)

基本設定：新一くんは蘭ちゃんに恋愛感情がまったくない。
キャラなどかなり捏造入っていますので、原作至上主義の方には肌に合わないかもです。

それは、あまりに突然の出来事だった。

*

冷たい外気から身を守るようにコートの前を合わせ、寒風から逃れて二階へ上る階段を駆け上がる。

いつものように探偵事務所の扉を開けると、窓辺で物思いに耽る蘭の姿があった。

ただいま、と子供らしく高い声で呼び掛ける。

こちらに気付いた蘭は憂い気だった顔に笑みを浮かべて、おかえり、椅子から立ち上がってコナンを迎えた。

3

「なんかボーっとしてたね？どうしたの、蘭姉ちゃん？」

「え、そうかな？なんでもないよ。それよりコナン君、何か温かいもの飲む？外寒かったでしょー」

「やったー、ありがと蘭姉ちゃん」

このところ考え込んでいる姿の蘭をよく見掛ける。

高校二年生の冬、一般的に考えれば今後の進路でも悩んでいるのだろうか。

本来ならばおそらく自分がまっさきに相談されていただろう悩み事を思うと、少し気がかりだ。

コートを脱ぎ部屋にランドセルを置いて事務所へ戻るとすでにテ-

ブルにホットミルクが用意されている。
頂きます、と声をかけてマグを手にとる。

「受験のこととか考えてたの？」

「え？」

「最近、よくそこから外見ながら何か考えてるじゃない？受ける大学とか悩んでるの？」

「やだ、コナン君たらあたしの同級生みたいなこと言うんだから、小学生なのに大学受験のこととかちゃんと分かってるんだねえ、さすがコナン君」

目を見開く蘭の反応に少し普通に話しすぎたかと焦るが、普段から大人びた会話に口を挟んでいるからか特に怪しまれることはなく、却って関心されてしまう。

内心で胸を撫で下ろし、何を悩んでいるのか聞き出そうとするが、反して蘭はさきほどと同じように視線を床に投げて眉を寄せた。

「……受験のこととかは、そんなに悩んでないの。あたしが考えてたのは、新一のこと」

突然出てきた自分の名前に、口に含んだホットミルクを吹き出しそうになる。

寸でのところで堪えて、咳払いをひとつ。

つい先日メールしたばかりだし、特に安否に関して心配させるようなことはないはずだ。

様子を伺うようにしながらもう一度マグを持ち上げる。

蘭は独り言のように、続きを呟く。

「もうすぐ終業式で、そしたら三年生じゃない？去年新一がいなくなったの、ちょうどその頃だったの。」

もう一年も経つんだなあっていうのと、ずっと休んでて進級できるのかなあっていうのと。……それから、
「それから？」

元の身体に戻れない身では進級のことなどあまり現実味を持って考えていなかったので、こちらが目から鱗だった。

正直なところ今一番気がかりなのは元に戻るか否かということ、
学業のことはこの次だ。

久々に現実に引き戻された気がして、ああそうかそういう問題もあったなと考えながら次を促す。

蘭は照れ臭そうに笑った。

「これ、新一には内緒ね？去年失敗しちゃったバレンタインのチョコ、今年は事前にちゃんと練習して上手に作るから、食べてほしいなあって」

へえ、と相槌を打つ。

世の中はすでにチョコレート商戦で賑わっているが、バレンタインそのものはまだ一ヶ月も先である。

蘭もいつちよまえに女子やってんだな、とか、俺にばっか作ってるからいつまでたっても彼氏ができないんだとか、楽しそうに話す蘭を眺めながら色々と感想を持つ。

ともあれ、一年近くどころも知れないどこかをほつつき歩いている幼馴染をいたく心配してくれているということが分かり、コナンは心がホッと温まるのを感じた。

まったくいいヤツだ、これで喧嘩っ早くなければ彼氏くらいすぐにできるだろうにと、こちらはこちらでいらぬ心配をする。

とりあえず元に戻ったら何かお礼をしなくてはならないなといったか
の話の頭に思い描き、コナンは飲み干したマグをテーブルに置いた。

「それじゃ、ちょっと僕、博士んち行つてくるね」

「あら、博士つて今、哀ちゃんも旅行中じゃなかった？」

「先週みんなでゲームやりに行ったときに忘れ物しちゃってたんだ。合鍵持つてるし、とつてくる」

「そうなんだ。暗くなる前には帰つてくるのよ？」

「はい」

忘れものというのは口実で、その実、子供の振りをせずに過ごせる唯一の空間として博士の家は大変に貴重な場所だ。

蘭の言うとおり、博士は先週末から灰原を連れて旅行中であり、珍しく博士の家には誰もいない状態だが、コナンには以前灰原の看病の際に手に入れた合鍵がある。

当の住人たちはそのことをすっかり忘れていたようだが、二人が旅行中とは言えコナンにも息抜きは必要だ。

気に入りの推理小説でも持ち込んでゴロゴロ過ごそうと企んで、コナンは探偵事務所を足早に後にした。

途中、人が住まなくなつて一年近く経つ我が家の前を通り過ぎる。そろそろ手を入れないと、戻ったときに本格的に大掃除をする羽目になるなど物憂げな息が出てしまうのは仕方がない。

それも当面は杞憂だろうと　　そもそも、灰原の研究が完成しないと元に戻ることすらかなわないのだから、要らぬ心配だ　　、
頭を振つて博士の家の門を潜る。

自宅の鍵と、探偵事務所の鍵が付いたキーホルダーに、もう一つ加わる変わったかたちの鍵。

鍵穴に差し込み錠を開け、人がいないことは分かっているが「邪魔するぜ」と一声かけてから玄関で靴を脱ぐ。

さてまずは暖房でもつけなければと思いつながらリビングへ向かいながら、ふと異変に気付いた。

廊下の先から、光が漏れている。

まさか電気を就けっ放しで行ったのか？

訝しみながら一歩進む。

コートを脱ぎかけたところでもうひとつ気付く。

数日人が空けていた家にしては、温かい。

外気と同じようにキンと冷えた空気を予想していた肌は、思いの外温かい室内に警戒を緩めているが、反してコナンの神経は総毛立つ。

何かがおかしい。

何者かが、この家にいる？

自らの存在を主張するように声を掛けて家に入ったことを後悔しながら、コナンは静かにリビングへ近づく。

音が立たないように廊下の先の扉を開け、室内を覗き込み

飛び込んできた光景に、息を呑んだ。

心臓も、一瞬止まったかもしれない。

「……はい、はるっ。」

今ここにいるはずのない、赤茶の髪をした。

妙齡の女性が、ゆったりとソファに腰掛けていた。

01 (後書き)

5年ぶりくらいにマトモにお話を書きました。勘が鈍ってますので
お見苦しい部分もあるかと思いますが、なんとなく雰囲気を読んで
いただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708y/>

きみと出逢うための

2011年11月3日03時07分発行